

特集 〈あたたかい〉

「あたたかさ」を想う

西原 彰宏

あたたかい食べ物、あたたかい色、あたたかい音  
色、あたたかい日、あたたかい眼差し、あたたかい  
雰囲気等々、あたたかいという言葉、私たちはさ  
まざまな対象に対して使う。では、私たちは、から  
だのどこであたたかさを感じるのだろうか。あたた  
かいということが単に熱くもなく、冷たくもないと  
いう温度の感覚であるなら、どうして私たちはそれ  
を人の眼差しや人柄に対して用いて違和感を感じな

いのだろうか。私たちは「あたたかい」という感覚  
をよく知っていると思っている。しかし、少し考え  
始めるや否や、温度感覚だけでは説明できないもの  
があることに気づく。

幼児にとって、あたたかいという言葉のイメージ  
はどんなものなのだろうか、と思い、風呂の中で六  
歳の娘とゲームを試してみた。「あたたかい何々」  
というように、「あつたかい」のあとに続けて、

うまくつながる言葉を交代で言うのである。「あつたかゝいストーブ」「あつたかゝいお茶」そのほか、風呂、湯気、服や猫も出てきた。しかし、最後まで「目（眼差し）」や「おかあさん」など、人に関係するものは出てこなかった。私がそれらの言葉を口にするると「それ、どういうこと」と聞くのだった。

このやり取りからわかることは、「あたたかい」とは、幼児にとつて、熱いと冷たいの中間の一定の温度をさすのではなく、寒かった体や手が何かによつてあたたまり、かじかんでいたものが解けて、生気をとりもどし、心地よくなることをいうらしいということである。「あたたかい」は、まず、体の緊張が解けて心地よくなる変化として、子どもの中にイメージができていくのではないか。

「あたたかい」という言葉が、物にも人にも使われるのは、それがいのちと関係があるからだろう。あたたまるとき、冷たさに対抗するための緊張と防衛が解けて、自分の内奥や大地の下からいのちが湧き

出してくる。「あたたかい」とは、いのちが復活する感覚でもある。

自分の子ども時代を思い出してみる。私が「あたたかい」という言葉ですぐに思い浮かべるのは、子どものころのある景色である。毎年、四月の初め頃、家の前の田んぼが一面のレンゲの畑に変わる。春先に生まれた真っ白な子ヤギたちが、親ヤギが草を食む横で追いかけてっこをする。その子ヤギを捕まえようとすると、親ヤギが叱るような声を上げる。子ヤギを抱きあげると、体がおそろしくあたたかい。気持ちがいいというより、おもちゃにできないものを子どもながらに感じるあたたかさである。レンゲ畑に倒れこんでかくれんぼをすると気持ちがいよいよ。冬の凍てついた田んぼとはまったく違うやさしさがある。

春先のあたたかさは、私たちに生物を生み出す力を持った土を意識させる。春の湿った地面から草が



のび出し、花が咲く。春の地面はあたたかい。それは冬の間埋もれていたいのちが再び生まれ出てくる源、可能性の潜在、希望のイメージを含んでいる。

草花や虫や動物の子どもなど、春に生まれ出てきたものを眺めるとき、私たちの注意は下方に向かっている。上を見上げる視線ではなく、足元を注意深く見る視線の中に、いのちの恵みや希望を見いださせるのが春のあたたかさではあるまいか。

あたたかさを、人に対して用いるイメージとしてはとらえていないからといって、小さな子どもが人のあたたかさや冷たさを感じていないとはいえない。もう一度自分の子どもの頃を思い出してみる。

私が四歳のとき、母の親戚にあたるひとりの老婦人が私の家に住むようになり、家事全般を切り盛りする「うちのおばあちゃん」になった。それまで家にいたのは、家事や子守りをさせて躰けをしてくれと、両親が頼まれた若い女性だった。この子守りは、私の両親が見ているところではおとなしなかった

が、見ていないところでは子どもに横暴で、ささいなことでも怒り、暴力を振るった。

その老婦人が家に入って間もないころ、私は何が悲しかったか、容易に泣き止むことができないくらい大泣きをしたことがあった。その時その人は私をおんぶし、泣きやむまで背中であやし、歌をうたってくれた。しゃくりあげながら、少しずつ落ち着いてくる間、その背中に体を預けながら「泣いたときにこんなことをしてもらっていいのか」と思った。五十を過ぎた今でも、その時の彼女の和服の背中を覚えてる。

私は、朝起きると台所に行き、朝の支度に忙しく立ち働くその老婦人の膝に座り、毎朝一時間ぐらいおしゃべりをするようになった。それが一年以上続いたと後に両親から聞いた。それは小さな子どもが再び大人を信じられるようになるのに必要な年月だったのだろう。聡明な彼女はそのことに気づき、それに長い間つきあってくれたのだと今は思う。

私が、彼女の背中のこと、膝のことを「あたたかい」ものとして思い出すようになったのは、保育の中で、人の子を背負うようになってからのことである。

子どもはまず人のあたたかさを受けとる体験をし、後になって、そういう体験にあたたかいとい

言葉を当てはめるようになるのだろう。人もまた、他の人の防衛や緊張を解き、その人のいのちの力が再び湧き出すようにするという点で「あたたかい」からである。

(国立音楽大学)

## 天使がいた

今井 七重

香港中国返還という歴史的瞬間に立ち会うことができ、から一年五カ月後、私は日本帰国を前に悩んでいました。当時小学四年生と二年生の娘たちから

は、精神的な支えはともかくも、時間的拘束を受けることが少なくなっていたので、日本に帰ってから徐々に増えるであろう自分の時間の過ごし方につい